

目次

| | | | | | |
|------------------------|---------|-----|---------------------------|---------|-----|
| 留学体験記 | (中島 美紀) | 1-2 | わが街／専攻紹介：南カリフォルニア大学映画芸術学部 | (渡部 宏樹) | 6-7 |
| 留学体験記 | (渡辺 悠樹) | 3-4 | 連載：(3) 旅について | (小野 雅裕) | 8 |
| 大学院生から助教授へ：1年間を振り返ってみて | (鈴木 ユミ) | 4-5 | 2012夏 留学説明会を振り返って | | 9 |

留学体験記

California Institute of Technology
中島 美紀

留学への決意

私が最終的に学位留学を決断するまでは紆余曲折がありました。高校時代から留学というものに憧れがあり、大学学部時代は積極的に英語の勉強をしたり、留学生向けの授業を取って彼らと積極的にコミュニケーションをはかったり、数週間の短期留学プログラムに参加したりなどしていました。修士1年の時に、大学の交換留学制度を利用してカリフォルニア大学サンタクルーズ校 (UCSC) に10ヶ月程滞在しました。この交換留学を上手く乗り越えて、学位留学へのステップにしたいと考えていましたが、現実はそのままで甘くありませんでした。沢山友人ができ、生活面では楽しい留学でしたが、自分の英語力不足、知識、経験不足などの為に、滞在中に中々研究が進まず苦勞しました。日本に帰国した際には、学位留学に対する自信は殆ど無くなっていました。しかしながら、帰国してから時間がたつにつれて、反省の念と共に再度留学に挑戦したいという思いに駆られるようになりました。私の専門である惑星科学分野では、NASA等の強力な観測機関を持つアメリカにおいて、世界最先端の研究が幅広い分野に渡って行われています。そのような環境下で研究に従事し世界に通用する研究者になりたいと考え、最終的に学位留学を決めました。尚、留学に際して村田海外留学奨学会様から2年間の手厚い資金的なご支援を頂くことができました。

交換留学と学位留学

色々苦勞した交換留學生活でしたが、学位留学を始めてから「あの時苦勞をしていて本当に良かった」と思うようになりました。まず英語やアメリカでの生活についてはある程度慣れていたので、すんなりと現地の生活を始めることができました。授業の毎週の宿題の分量には泣かされましたが、授業について行くこと自体

はそれほど大変ではありませんでした。交換留学時代は、語彙力や知識の問題もあり、友人と文化、食事の話位しかろくにできなかったのですが、今は政治の話、歴史の話なども積極的にしています。英語力の向上により、友人ともより深い関係を築けるようになったと感じています。

交換留学は所詮「お客様」扱いで、特に責任もなく、嫌になったら帰ればいいのですが、学位留学はそうはいかない...様々な苦勞はありますが、その分得るものも格段に大きいのが学位留学であると感じています。

交換留学と学位留学の一番の違いは、交換留学は所詮「お客様」扱いで、特に責任もなく、嫌になったら帰ればいいのですが、学位留学はそうはいかない所です。研究を進めて成功させるのは自分の責任であり、失敗しても帰る所はありません。卒業の為に、学科の進級試験に受からなければならないし、周囲との競争の中、論文やリサーチプロポーザルを書き続けなければなりません。しかしそれは将来研究者を目指す者にとっては最高の訓練です。様々な苦勞はありますが、その分得るものも格段に大きいのが学位留学であると感じています。

研究について

私は現在、月の形成論をDave Stevenson教授と行っています。地球の月は天体同士の巨大衝突で出来たと考えられています(ジャイアントインパクト説)。しかし、現在の理論ではこのモデルで月形成を上手く説明出来ない点もあり(地球と月のマントル中の元素がほぼ同じ同位体比を持っていることなど)、精力的に研究されている分野です。同教授は月形成について30年以上も研究を続

けており、この分野において世界的な第一人者です。彼は月形成のみならず、惑星内部、惑星磁場などについても幅広く研究をし、豊富なアイデアを持っている人です。物理的な洞察も非常に鋭く、日々の研究の中で彼から感銘を受けることが多々あり、このような教授と研究出来ることは本当に幸せだと感じています。研究は今の所順調で、Ph.D.取得まで同教授と研究を進めて行く予定です。

自分の毎日の研究生活ですが、意外にも日本でもアメリカでも大して違いはありませんでした。私は毎日大体朝9時頃登校し、夜7-8時頃まで大学で研究をしています。殆どの時間を数値計算、論文読み、学生や教授との議論、授業などに使っています。特に時間に拘束されることもないので、疲れたら友達とカフェに行き一休みしたり、運動(サッカーなど)をしたりしています。この辺りは、日本に居た時の自分の研究環境とさほど違いはありません。ただ、周りの学生は夜遅く迄残っていることはあまりなく、効率的に研究して早めに帰宅し、プライベートの時間を満喫しようとしている様子が見受けられます。私はついダラダラと研究してしまうことが多いので、彼らを見習って効率よく研究出来るように努力しています。

世界的な研究ネットワークの構築

アメリカのトップスクールで研究をすることの最大のメリットは、世界的なネットワークを築き易いということが挙げられます。私が日本で所属していた研究室の教授は世界的にも有名な教授で、海外から様々な研究者が来ていました。しかし、予算の都合や地理的な関係から多くても数ヶ月に一人、というのが限度でした。一方 Caltech では、潤沢な資金やその立地を生かし、アメリカ国内外から週に2-3人の研究者を呼んで講演をしてもらっています。また、学生はこのような研究者とご飯に行けたり(大学側がカバーするので無料)、議論が出来たりするなど、まさに至れり尽くせりの環境です。更に、学会等で発表する場合、大学名は研究の注目度を左右します。これは本当は良いことではなく、各研究はその内容に基づいて判断されるべきだと思います。しかし現実問題として、やはりトップスクールでの研究は信用されやすく、多くの人が講演を聞きにきたり、名前を覚えてくれたりします。個人として既に有名な人の研究は大学名に左右されませんが、大学院生として研究を始めたばかりの頃などには、やはりこの差はかなり大きいと思います。

今の所、Ph.D.取得後もアメリカで研究を続けていきたいと思っています。やはりアカデミアのポスト争いは日本でもアメリカでも熾烈で険しい道ですが、今の環境を最大限に生かして研究の推進、ネットワーク構築に邁進して行くつもりです。

日常生活

異国の地での生活はさぞ心細いのではないかとと思われるかもしれませんが、意外にもかなり楽しく生活しています。週末には皆でハイキングに行ったり、スポーツをしたり、遊びに行ったりなどしています。今年のサンクスギビングには、友人と一緒にバンに乗ってグランドキャニオンなどの国立公園をまわりました。このような

いい仲間と巡り合うことができ、本当に幸せだと感じています。勿論、日本の家族、友人や、食事、文化などが恋しくなることもあります。今はskypeなどもあるし、日本食もアメリカで食べられますから、ホームシックに浸ることも無く過ごせています。



去年のサンクスギビングで大学の友人と旅行に行った時の写真。

留学を目指す方へ

自分の研究、成長が周りの環境に影響される人には、是非留学の道も考えて欲しいと思います。本当に研究の出来る人は自分でネットワークも作れるし、指導教官が居なくても自分で研究を進めることが出来るので、わざわざ苦労して海外に行く必要もありません。そこまで出来ない人こそ、海外に出てそのような恵まれた環境の中で研究することに意味があります。私は留学をして本当に良かったと思っています。確かに学位留学はリスクも少なくありませんし、国内での研究が向いている人もいると思います。しかし、興味があるならば是非挑戦して頂きたいと思います。投資するだけの価値はあります。



中島 美紀
東京工業大学 理工学研究科 地球惑星科学専攻(学部、修士)修了
カリフォルニア工科大学 地球惑星科学専攻(Ph.D.)
Division of Geological and Planetary Sciences, California Institute of Technology

留学体験記

はじめに

修士1年の夏のある日、彼女から夜に工学部で留学説明会が行われるらしいという話を聞き、何気なく立ち寄ってみたのが私の留学のきっかけであった¹⁾。それから出願までわずか四か月しか残されていなかったが、私はそのうちの一か月を米国の大学院を訪問して周ることに費やした。その際に出会った現地で活躍している日本人達は、失礼ながら変わった人たちばかりで、どこかスケールが大きく、自分もこの仲間入りがしたいと留学への決意を新たにしました。

限られた時間の中でのめまぐるしい留学準備は、思い出だけで吐き気がするほど忙しいものであった上、計画的な大多数の人には参考にならないはずなので割愛することにします。代わりに本稿では「米国の大学院生のティーチング」に的を絞って私の体験を紹介していきたい。というのも、これまでの類似の記事であまり焦点が当てられていなかった事項であるにもかかわらず、私の留學生活の多くのウエイトを占めているからだ。ただし大学・分野ごとに事情は大きく異なるため、以下に述べるものがどれほど一般的なのか定かではない点に十分注意していただきたい。



物理学科の建物内で私が一番好きな場所。教授との議論や生徒間での交流が盛ん。Kavli IPMU²⁾の設計の際もこの雰囲気を真似たとか。

米国大学院生の「優遇」

「米国では大学院生も一年目から給料がもらえる」「日本よりも留学生に対して待遇が手厚い」といった謳い文句をよく耳にする。これは本当だろうか。私が在籍するカリフォルニア大学バークレー校大学院の学費は年間120万円、さらに州外出身者には追加で年間120万円が課せられる。年額50万円程度の日本の国立大学に比べはるかに高い。これを全て学科に肩代わりしてもらい、その上さらに月18万円程度の生活費まで支給してくれるというのだから確かに手厚い待遇なのだが、実はタダでというわけではないのが味噌である。潤沢な資金を持つ実験系の研究室の中にはリサーチアシスタント(RA)として研究に従事するだけでいい場合

もあるが、特に理論系の大学院生は学部生に対するティーチングアシスタント(TA)を勤める必要があるのが一般的なようだ。私の合格通知には、少なくとも一年生のうちは週20時間(50%)をティーチングに割く義務があることが記されていた。この50%という数字は、一日8時間学術活動に充てるとして週合計40時間の半分にも及ぶことを意味する。つまり、授業料免除に生活費支給は嘘ではないのだが、その分ちゃんと義務があるわけだ。

ティーチングの具体的内容

もちろん講義は教授陣によって行われ、私たち大学院生はdiscussionというセッションを受け持つ。先学期担当した科目の例では、週3回講義が行われ、さらに週2回計4時間のdiscussionが補習や実習に充てられた。週に3回も講義があるので学生は当然消化不良を起こす。それを板書や問題演習を通して補っていくのが私達の役割だった。

ちょっと想像してみしてほしい。教科書と問題集を与えられ、英語で2時間も通して授業を行うのである。まさか、一度も学生として経験したことのないアメリカの学部の授業を、いきなり教える立場から始めることになるとは思ってもみなかった。このdiscussionの時間をどう使うかは完全に私たちに委ねられており、裁量がある分組み立てが難しい。初日、私は自己紹介等を終えると早速問題演習に移ったが、学生からまず内容を分かりやすくまとめてくれとの要望があり、その次の回からは板書用ノートを前もって準備し、前半をその週の講義内容のまとめに充てるスタイルに変更した。

ティーチングに対する大学院生の姿勢も日本のそれとは比べ物にならないほど真摯である。中でも特に衝撃的だったのは一学期目に「ティーチングをするための講義」を履修させられたことだ。この講義では教官の監督の下、各自の担当クラスで生じた諸問題(例えばある学生が「講義についていけない!」と癩癩を起してしまった等)の解決案を皆で話し合い、さらに“Teaching Physics With Physics Suite”という、まさに物理教育法についての教科書を一冊輪講した³⁾。学期末の課題はTeaching Portfolio —ティーチングに対する自分のphilosophyや、最も効果的と考えるティーチング方法についてのレポート—の提出であった。

週20時間の内訳は以下の通り。私は2クラス分担当だったため合計週8時間discussionの授業を行った。加えてoffice hourという個人的に学生から質問を受け付ける時間が2時間。さらに毎週1時間ほど同じ科目を担当するTA同士が集まり、各自の進捗状況の確認や実習の打ち合わせを行った。

残りの時間は授業の準備や宿題・実習レポートの採点の時間とされた。中間試験が2回、期末試験が1回あったが、その試験監督や採点も全て私たちが行った。教授からの差し入れのピザとコーラを片手に何百枚にも及ぶ答案用紙の束を夜な夜な採点してい

(1) 2010年7月30日に東京大学本郷キャンパスで行われた、UT-OSACと米国大学院学生会による海外大学院留学説明会。

(2) Institute for the Physics and Mathematics of the Universe, 東京大学高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構

(3) E. F. Redish 著。丸善出版から「科学をどう教えるか —アメリカにおける新しい物理教育の実践」(日本物理教育学会 監訳)という邦訳が出ている。

った記憶が蘇る。定期試験はもちろんのこと毎週の宿題でさえも採点后学生に返却しなければならないので、いい加減に採点するわけにはいかない。米国では成績(GPA)が非常に大切で、少しでも疑問があれば採点し直しを要求されることになる。実際私はある学生と、部分点の配点を巡って半日にも及ぶ熱戦を繰り広げる羽目になってしまった。

日本との比較

日本の修士課程在籍時にも学部生の演習の授業のTAをしたことがあるが、その負担も給料の額もまさに小遣い稼ぎのアルバイトという感覚だった。同じTAでも、質・量ともにいかに異なるかが伝われば幸いだ。一点付け加えると、担当した学生の一人から大学院入試にあたって推薦状を書いてほしいと頼まれ驚いたが、地元の話によればこれはよくあることなのだそうだ。ここからも米国における大学院生の立場が伺える。

これだけ聞くとどうしてわざわざ海外までそんな苦勞をしに行くのかと疑問を持たれるだろうが、大学院生が真剣にティーチングに取り組んでいる以上に教授陣の大学院生に対する教育や研究指導に熱意を感じる。講義はまるで教授と会話をしているようで自然と引きこまれてしまし、苦勞して解いた宿題は上学年のTAによってきちんと採点されて返ってくる。日本にいたときよりも教育・トレーニングを受けている実感が強いというのが正直な感想だ。

まとめ

以上のように大きな負担を強いられるティーチングであるが、これをどれくらいの回数行わなければならないかは大学・分野によって大きく異なる。2,3学期分担当することが卒業要件であることもあれば、卒業までほぼ毎学期ずっと教え続けなければいけない場合もある。教えるにしても週5時間程度の負担で済むこともあると聞く。研究に集中したいのであれば日本からの奨学金を持っていくことの重要性は明らかであるが、志望校を選ぶ際にもティーチ

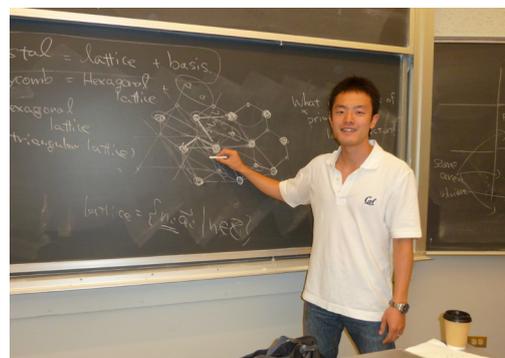
ングの量はチェックポイントの一つに加えるべきかもしれない。一般に州立大学の方が私立大学と比べ、負担が大きい傾向がある。

ここまでティーチングの大変さを強調してきたが、デメリットばかりではない。将来教授職を目指すのであればこの経験はゆくゆく役に立つだろう。手前味噌ではあるが、私は学生からの授業評価や投票によってOutstanding Graduate Student Instructorという賞を頂くことができた。これも卒業後の職探しの際に評価していただけると期待している。

最後に

「留学体験記」というからには留学を体験し終えた人の後日談のはずだが、実は私はまだ二年目が始まったばかり、年末には「二度落ちると退学になる」と言われるQualifying Examを控えている。Ph.D.への道はまだまだ先が長い。

最後に、ひょんなことから自ら遠距離恋愛に導いてしまった冒頭の彼女とは、幸い来年初夏に入籍予定であることを報告させていただき、結びとしたい。



渡辺 悠樹
カリフォルニア大学バークレー校 物理学科Ph.D.コース2年

今学期教えている固体物理学の教室にて。物理学科の大学院生252人の中で日本人留学生は自分ただ一人。

大学院生から助教授へ：一年間を振り返ってみて

University of South Dakota
鈴木 ユミ

私は去年ニューヨーク州立大学オルバニー校で刑事政策の博士号を取得しました。この大学院の博士課程は留学生は少なく、中国、韓国、そしてロシアやイギリスから数人、日本からは私一人でした。修士号をイリノイ州で取得してからこの大学院に来ましたが、修士号を持っていようが関係ないくらいクラスを取らなくてはならず、しかも入学してすぐカリキュラムが変わり卒業が遅れる生徒(私も含めて)もいました。又、イリノイにいた時は頻りにグループで勉強し友達もできやすかったのですが、この大学院ではあまりそういうグループもなく個人で黙々と勉強・研究ということが多かったです。でも自分で何でも始めなければならないし、自分の研究は自分しかその重要性を十分理解できていないので学問的・精神的な訓練ができたのではと思っています。

学問的・精神的な訓練は特に大学で教員職を探すときに役に立ちます。通常書類審査のあと電話でインタビューがあり、その後大学に呼ばれ最終面接となります。呼ばれた大学で2日間ほど自分の研究の発表や教授・生徒から様々な質問を受け、お昼・夕食中も気が抜けない状況でした。私の場合最終面接で2つの大学に行きましたが、サウスダコタ大学での面接後その場で仕事のオファーがありびっくりしました。1月にその大学に呼ばれ冷たい風の中大学を案内してくれた教授が、「寒いからこの辺で終わらせて中に入ろう」という場面もあり、冬の寒さを心配しましたが人が温かいし仕事の内容も希望通りだったので今、サウスダコタ大学で犯罪学を中心に教えています。アメリカ中西部の特徴であるフレンドリーな環境で学期中非常に忙しい中でも生徒や他の教授と気

軽に話ができる機会が多いので助かっています。助教授になって丁度一年が経つので、大学院生活と比べ違う点を授業、研究、そして生徒との関わり面から紹介させていただきます。

授業

まず気が付いたのは、フルタイムの教員はTAに比べたら(当たり前ですが)超忙しいということ。最初の夏休みは秋学期に授業の準備で終わってしまい、卒業後ゆっくりする暇もありませんでした。学期が始まると、まず最初に自己紹介をしました。これはTAの時は全くしなかったのですが、フルタイムの教員だともっと生徒を知りたいし自分のことも知ってもらいたいと思い、恥ずかしながらやらせてもらいました。授業の一部として議論をするにも、最初は恥ずかしがって何も言わない生徒も議論の内容によっては参加することもあり、この点は大学院生も一緒ですね。おそらく一番の違いはスマートフォンやラップトップの使用だと思います。大学院生はこういったものを授業中に悪用するのいうのは少ないと思いますが、私の担当したクラスの学生65人中、10人位は授業中にメールを送ったりフェイスブックを読んだり悪用が目立ちました。ただこの生徒の良いところは、ひとことスマートフォンやラップトップは禁止と知らせるとほとんどの生徒が守ってくれることです。



USD campus (晴天の多いサウスダコタ:キャンパスの名所・オールドメイン)

自分の研究

恐らく多くの新助教授は自分の研究に最も時間を費やしたいと思っています。しかし最初の1年間は新しい環境に慣れるのと教える教科の準備で終わってしまうのが現状ではないでしょうか。私の場合冬休みを利用し、論文を基に学術雑誌に出版できる記事の下書きを終了し、改正などを夏休みにしました。

私が大学院から研究している課題は性犯罪女性被害者と市民の性犯罪に対するみかた、そして刑事政策制度や被害者対応機関の利用状況を主に調査しています。特に大学生を中心にこの課題を研究していますので、近いうちにサウスダコタ大学生の意見調査も計画しています。教授となると担当のクラスで自分の研究を教科に組み込むので、その柔軟性に感謝しています。大学院生の時から犯罪学会で自分の研究の発表をやっていましたが、教授になり学会発表の旅行費も大学側が全額負担してくれるので大変助かっています。又、自分の研究に近い科目(被害者学、犯罪心理学、比較刑事政策)を教える機会もあり、教員生活には満足しています。

生徒との関わり

大学院に比べるとこの大学の生徒・教授関係はかなり柔らかいです。例えば地元のスーパーで買い物中生徒から“Hi, Yumil!”と声を掛けられたり(スーパーは町に2軒しかないの、会う確率も高いわけです)、大学内でも生徒が“鈴木教授元気ですか?”などと話しかけてくる場面もあります。

又、私のオフィスに立ち寄る生徒は多いので個人的に知り合うことができ楽しいです。特にアドバイジングセッション(担当の先生に会って次の学期に取る科目を決める)は教授職の一部で、一人の生徒と20分位科目についてや将来の目標などを話し合います。卒業後何をするのかまだ分からない生徒も、様々なクラスを取った後やインターンシップ中やりたいことを見つけ卒業予定の生徒もいるので、できるだけ多くの自分の担当の生徒に会うようにしています。TAとしてはここまで生徒の世話はしなかったの、この新しい役割を十分楽しませてもらっています。



Bunnies on campus (キャンパスは自然に囲まれています)

最後に

サウスダコタ州南東部の生徒数約1万人の大学で助教授となり早1年。博士号取得後2日半引越してドライブ中、多少教員生活に不安がありましたが、1年の経験を積み時間調整や研究も安定してきました。フルタイムの教員生活は大学院生の生活に比べるとかなり忙しいですが、大学院での学問的・精神的トレーニングを生かし頑張れると確信しています。アメリカの大学院で将来勉強したい方、現在大学院で頑張っている方、又将来アメリカで教えたい方、努力は無駄になりませんので目標に向かって毎日頑張りましょう!



鈴木 ユミ
サウスダコタ大学 刑事政策助教授
栃木県出身。学士・修士・博士号をアメリカで取得後、現在サウスダコタ大学で犯罪学を中心に教えています。連絡先:yumi.suzuki@usd.edu

わが街／専攻紹介： 南カリフォルニア大学映画芸術学部

University of Southern California
渡部 宏樹

私は現在ロサンゼルス(LA)にある南カリフォルニア大学(University of Southern California、以下USC)の映画芸術学校(School of Cinematic Arts)博士課程に在学中です。映画芸術学校と言う名称はわかりにくいですが、米国では一般にFilm Schoolという映画に特化したプログラムが総合大学に組み込まれていたり、単科大学として存在しています。本稿では、LAの土地柄とFilm Schoolとはどういうものかについて紹介します。

わが街:LAの治安と学校の犯罪対策

LAの魅力については2012年4月号にUCLA博士課程在学中の山田亜紀さんが執筆されているので、そちらを参照してください。私は、あまり耳障りのいい話ではありませんが、LA(より一般に米国の都市)の治安について書きます。というのも、LAでは2012年4月にUSCの大学院生2名がキャンパス付近で射殺されるという事件があったばかりなので、米国の街の魅力と同時に注意すべき点についても紹介しておきたいと思ったからです。

アメリカのある程度治安が悪い都市部で生活するときには注意すべき点とは具体的にどういうものかを簡単にまとめておきます。



射殺された二人の学生の追悼のために集まった学生たち(Daily Trojanより)

1. 治安の悪いエリアを把握しておく

例えば、ダウントウンでも再開された商業地区は非常に綺麗で夜女性一人で出歩いても大丈夫ですが、一本裏通りに入るだけで、明らかに危険なエリアに迷い込んでしまうという事はよくあります。危険な場所の情報は地元の人から聞くなど事前確認しておくべきです。また、カリフォルニアは医療用マリファナが合法なので、そこかしこからマリファナの匂いがします。実際に合法的にマリファナを使っている人もいるので麻薬ほど敏感になる必要はないのですが、私はマリファナの匂いを嗅いだ時は、日本で泥酔している人に対するのと同程度の警戒はするようにしています。

2. 夜は出歩かない

それほど治安が悪くない場所でも、基本的に日が暮れてから目的もなく一人で出歩くという事は避けるべきです。どうしても夜に外出する必要がある場合は複数人で歩くか、(女性の場合は)男性

と一緒に歩く、また公共交通機関ではなくできるだけ車を使うようにする必要があります。車で誰かを送るということもアメリカでは多いと思いますが、送って行くのが夜間の場合、送った人は送った相手が家の中に入るまで車の中で待っておくというのがマナーになっていると聞きました。これはもし送った相手が家に入るまでの間に誰かに襲われた場合すぐに対応できるからです。

3. 高価な装飾品、電子機器、派手な服装を避ける

治安のよくない場所で夜に高価なものを見せびらかすのはもってのほかですが、日中比較的治安が良い場所でも、周りに人気がないときは白昼堂々ひたたりや強盗がすることも珍しくはないようです。昼間の地下鉄の中でiPodで音楽を聴いていたら、見知らぬ相手に引っ掴まれて持って行かれたというような話は、にわかには信じがたいのですがよく聞きます。

4. 強盗にあった場合逆らわない

誰もが銃を持っている可能性があるという点が日本との大きな違いです。こちらが男だけのグループで相手が一人だけだとしても抵抗すべきではありません。また、強盗にあったときに現金が全くないと強盗が逆上する可能性もあるので、数十ドル程度は現金を財布に入れておいて、それで見逃してもらえるようにすべきだということも聞きます。

冒頭で述べた大学院生が2人射殺された事例の場合、これらすべての項目を守っていなかったようです。彼らはUSCキャンパス近くの比較的治安が悪い場所で、夜中の一時に車の中でカップルでしゃべっていたようだと言われています。犯行現場の検証から、男性の方は車の外で撃たれており女性のほうは車内で撃たれていたことから、男性のほうに抵抗した可能性があるのではと言われています。真実は誰にもわかりませんが、彼らが犯罪に巻き込まれやすい状況に身をおいていたのは間違いないでしょう。

大学の対策

LAのダウントウン付近の比較的治安が悪いエリアに位置するUSCは、学生の安全を確保するために独自の対策をとっています。

大学周辺の学生アパートなどが多い数ブロックのエリアを、重点的に安全対策をとるエリアとして指定し、黄色のジャケットを着たセキュリティー・スタッフや大学のセキュリティーに直通する公衆電話を設置しています。またこのエリア内では夜遅くに学校から徒歩で帰宅する学生のためにキャンパス・クルーザーというタクシー・サービスを無料で提供しています。

残念ながら二人の学生が射殺されたのはこのエリアの少し外側でした。今回の事件を機に、USCはこの治安対策を行うエリアを拡大し、キャンパスのごく近くに学生寮を増やすという決定を下しました。USCはおそらくアメリカの大学の中でもかなり犯罪対策に

力を入れている大学だと思いますが、それでも定期的にUSCの学生が巻き込まれた軽犯罪を周知するメールが配信されます。最終的に自身の安全は自分で確保しなければならないので、みなさんも留学が決まったときにはぜひ安全面にも目を向けていただければ幸いです。



大学の周辺地図とキャンパス・クルーザーの範囲。中心の濃い灰色がキャンパス、赤い線で囲まれた部分がキャンパス・クルーザーで送ってもらえる範囲。この赤い範囲は大学が重点的にセキュリティー・スタッフや緊急時の電話を配置している範囲とほぼ一致する。USC Transportationより

専攻紹介: Film Schoolとはなにか?

さて、暗い話ばかりしてもしょうがないので少し楽しい話もしましょう。アメリカの娯楽と言えば第一にハリウッド映画が思い浮かびます。米国においては映画の学術的研究と実践的な技術の教育・研究の場としてFilm Schoolと呼ばれる大学のプログラムが存在しています。USCは1929年に全米初のFilm Schoolを作った大学であり、設立当初から、ProductionとCritical Studiesという二つの学科をFilm Schoolの柱としています。

Productionはその名の通り実際の映画作成に関わるものです。カメラ、照明、音響などについての理論的、実際的な研究はもちろん、製作やマーケティング、脚本技術、配給などのノウハウなどもここには含まれています。現在では、アニメやTVゲーム、インタラクティブメディアなどもこのカテゴリーに含まれています。USCは地理的、歴史的な経緯からハリウッドとの関わりが非常に強く、ハリウッドの映画産業の主要な人材供給源となっています。

USC School of Cinematic ArtsのProductionコースとハリウッド映画産業のつながりの深さは、ハリウッド映画産業からの寄付金に見て取れます。2006年に自身も卒業生であり映画監督/プロデューサーであるジョージ・ルーカスが1億7500万ドルの寄付をしました。ワーナー・ブラザーズ社、フォックス社、ウォルト・ディズニー社などからの寄付金とあわせて、School of Cinematic Artsは新しい施設の拡充をはかり、地中海復古様式の新校舎にはジョージ・ルーカスとスティーブン・スピルバーグの名前が冠されることになりました。ルーカスはもともと映画製作のデジタル化を積極的に推進していたこともあり、以降、School of Cinematic Artsでもデジタル機材での教育、研究がより一層進みました(映画関係者にはフィルムの質感を好む人も根強くいて、スピルバーグなどはどちらかというところ側の人です)。ルーカス以外にも多くの卒業生や映画業界の人が寄付をしており、この新校舎の中では寄付をし

た映画関係者のネームプレートを数多く見ることができます。

一方、Critical Studiesの方はより学術的な研究です。Critical Studiesというものを一言で説明するのは難しいのですが、誤解を恐れずに言えば、映画に関連するあらゆる現象を対象に実証的なデータと理論に基づいて再検証可能な科学的な議論をしようという試みです。例えば、Critical Studiesに典型的な問いとしては「ハリウッド映画の中で黒人はどのように表現されてきており、それは米国の社会状況(経済、他国との関係、国内での差別意識)とどのような関係があるか」といったテーマが考えられます。この問いに答えるために、実際にハリウッドが制作した映画について、映画研究がこれまで蓄積してきた様々な映像を分析するための理論を援用しながら、必要に応じて、統計データ、政治文書、新聞記事などを参照し、論理的に検証可能な論文を執筆します。批評はある特定の作品に対してその作品としての良し悪しを(多くの場合、主観も含めて)論じるものなので、その点が映画研究との非常に大きな違いです。また、日本で映画研究というどうしても作家主義的な美学的分析や作品研究が注目されがちですが、School of Cinematic Artsでは、その名前からわかる通り、あらゆる種類の動的な視覚文化を対象としており、TV番組、ミュージック・ビデオ、TVゲーム、メディア・アート、インターネット上のコンテンツなども研究対象とされています。

USC School of Cinematic Artsはこの実際の映画の製作と学術的な研究の両立を理想として掲げています。Productionに所属する学生でもCritical Studiesの授業を履修することを求められ、単に実践的に映画製作の技術を身につけるだけでなく、自身の映像を作るという行為や出来上がった映像作品に対する批評的な態度を学ぶことも求められます。逆もまた然りで、私はCritical Studiesに所属し、19世紀のアメリカにおける映画に先攻する視覚文化と初期映画の関係について研究していますが、今学期は必修の映画製作の入門的な授業を履修し、時代劇を撮っています。私は映画製作の専門家ではないので、戸惑うことが多いのですが、映画製作の経験は学術的な研究をする上でも非常に大きなプラスになっています。実際に自分の手で映画を作ったあとで映画を見てみると、それまでは見えてこなかった技術的な側面がよく見えてきます。

USC以外の他の大学のFilm Schoolが必ずしも理論と実践の両方をカバーしているわけではありません。ただ、映画を発明した国の一つであり、20世紀を通してハリウッド映画の文化的覇権の確立とともに超大国として君臨したアメリカという国にとっての、映画というメディアの重要性は私たち日本人には測りかねるものがあります。少なくとも映画に特化した教育プログラムを80年以上前から作りあげて、国中の大学にその制度を普及させたということは、映画を製作し、考えることがアメリカ人にとって文化の一部として定着しているということでしょう。

渡部宏樹
南カリフォルニア大学映画芸術学部 Critical Studies専攻

連載: The Philosophy of a Bohemian (3) 旅について

慶応義塾大学 理工学部
小野 雅裕

僕が留学を決めたいまひとつの理由は、旅が好きだったからだ。僕はバックパッカーだった。旅程を決めずホテルも取らず、リュックサックひとつ背負って気の赴くままに旅をする。地元民に混じって汗臭いバスに揺られ、シャワーのお湯が出ない一泊5ドルの安宿に泊まり、カタコトの現地語で心温まる交流をすることもあれば、怪しい日本語を喋る悪徳商人に騙されることも度々。そんないい加減な旅を、学生の頃は休みの度にしていた。

訪れる観光地、泊まるホテルから三食のメニューまで全て予定が組まれたパッケージ・ツアーと違い、バックパックの旅路では何が起るのか、誰に出会うかは、全く予想不可能だ。ペルーやインドネシアで子供たちの草サッカーに飛び込み、キューバやニカラグアでは草野球に混じった。家に招待されてご馳走になったことも何度かあった。ガンビアで宇宙好きの青年と出会ったり、キューバでドラえもん好きのオタクに出会ったりした時には、僕から夕食に誘った。韓国でうっかりパスポートと一緒に海に飛び込んでしまったり、メキシコで夕食に誘われ付いていってみれば相手がゲイだったなどというハプニングも、今では笑い話だ。

行き当たりばったりの旅に慣れるにつれ、「やってみれば案外何とかなる」ということが分かってくる。コスタリカからニカラグア国境へ向かった時に、ただバスを乗り継いで行ってもつまらないからと、川沿いの町で降り、民家を一軒一軒ノックして、船を出してくれないか聞いて回った。何事もやってみるもので、路上で会ったオバサンから「アントニオが船を持っている」という唐突な情報を得た。アントニオとはどこの誰ぞや、と思ったが、小さな町だったのでいとも簡単に見つかった。かくして僕らは翌朝にアントニオの小船に乗って川を下った。しかし、無事に目的地に着いた安堵よりも、途中で見た素晴らしい風景のほうが、旅の思い出として強く記憶に残っている。Caño Negroと呼ばれるその一帯は野生の宝庫で、そこらじゅうにワニが泳ぎ、色鮮やかな熱帯の鳥が群れていた。黒く大きな羽を朝日に向けて凜然と広げ、その間から白く長い首を伸ばす美しい水鳥がいた。アントニオがそれを指差しつつ僕らの顔を見て、「アニングー！」と叫んだのを覚えている。

もちろん、無計画な旅は相応のリスクも伴う。道に迷う、ぼたくらられるなど小さなトラブルは日常茶飯事だが、大きなトラブルも二つ経験した。ひとつはガンビアで川に飛び込んで足を切り、麻酔なしで三針縫ったこと。もうひとつはバハマで強盗に遭い、ナイフを突きつけられて身包み剥がされたことだ。しかし、リスクがあるからといって旅を止めようとは決して思わない。いずれの時も多くの現地人の優しさに助けられ、むしろトラブルに遭った場所を好きになった。おかげで飲み会で披露する武勇伝に事欠かないし、多少の事には動じない度胸がついたと、ポジティブに考えている。

「人が旅をするのは目的地に到着するためではなく、旅をする

ためである」というゲーテの言葉がある。お目当ての観光地に予定通りに着きピースして写真を撮るだけの旅に旅情はない。旅の途中の心温まる出会いや予想外の体験にこそ旅の醍醐味があるのだ。

そして想像力のある人ならば、ゲーテが先の言葉で人生を旅に例えていることが分かるだろう。たとえば、大学の専攻や研究室を、就活に強いかそうでないかで選ぶ学生がいる。留学すると就活に有利になるか、などと質問する人もいる。彼らはそこまでして人生の旅程を前もって定め、パッケージツアーのように予定通りの一生を歩みたいのだろうかと思ってしまう。高校時代を大学受験のために過ごし、大学時代を就職活動のために過ごし、就職したら安心した老後を送るための貯金を作ることにいそしんで、その先にある目的地とは一体何だろう。死でしかないではないか！そんな目的地に予定通りに到着するためのパッケージツアーなど、何の意味があろうか！ゲーテの言葉をこう言い換えることができよう。人が生きるのは死ぬためではなく、生きるためなのだ。

そうは言ったところで、偉大な先人たちの波乱万丈な生涯と比べれば、僕の今までの人生などこの上なく平穏だ。現在の日本は雲行きが怪しいから、若者が安定志向になるのも無理もない。だから受験勉強や就職活動を真面目に頑張る人を悪く言う気は毛頭ない。でも、いくら平凡で保守的な人生だって、要所要所に訪れる分岐点、たとえば学校選び、専攻選び、研究室選び、会社選び、ひいては「婚活」などにおいて、受験や就活に強いとか、大企業だから安定だとか、そういった退屈な打算のみで選ぶのではなく、自分はこれが好きだからこの道を選ぶのだと素直に言えるような、そんな単純な生き方の方がきっと面白い。バックパック旅行のように「やってみれば案外何とかなるさ」くらいの気持ちで気の赴くままに歩を進める方が、ちょっくらいリスクがあったって、人生という旅の途中の豊かな出会いや美しい景色を楽しめるものではないかと、僕は思う。



ニカラグアで草野球をした子供達と(筆者は右上)

小野 雅裕
慶応義塾大学 理工学部物理情報工学科 助教

2012夏 留学説明会を振り返って

留学説明会実行委員
文責: ニュースレター編集部

今夏、日本全国6大学(九州・名古屋・東京・東工大・北海道・東北)にて大学院留学説明会を開催致しました。計600名以上の方々に参加して頂きました。

米国大学院学生会は、日本の大学生にとってのアメリカの大学院への足掛かりになることをその目的としています。そのために、日本にいる学生・社会人の方々にアメリカへの留学がどのようなものか伝える説明会を行うことは重要な活動の一つです。説明会を運営した当会メンバーとの話し合いの中で、説明会の成功のために重要な要素が3点浮かび上がりました。その3点とは、大学の協力、講演者選び、そして開催校です。

まず、会場の予約や運営はもとより、学生たちへの宣伝など、説明会は学生会、大学、そして学生の協力なしでは成り立ちません。各大学の機関や現地にいる学生に多くの協力を頂きました。米国大学院学生会創設の2010年から5回目の開催となりますが、今までの説明会に参加して頂いた学生が実際に留学するようになり講演者として参加し、また説明会を運営するという喜ばしいこともありました。

次に、講演者選びですが、講演者の幅が求められるように感じます。性別、専門分野、大学院での現在の立場、卒業後の進路など、講演者に幅があることで参加している学生達が共感できる講

演者を見つけやすくすることができ、アメリカの大学院という進路が現実的な選択肢として見えてくるものと思います。特に、各大学出身の卒業生が講演・パネルディスカッションを行うことが、今後留学を志す在学生にとって強い励みになることも多いです。例えば、当会で初めて東北大学で留学説明会が開かれましたが、東北大学特有の成績の互換などについて卒業生の先輩方が在学生にアドバイスし非常に分かりやすかったという感想を参加者の方々より頂きました。今後開催される説明会でも講演者を募集する予定なので、留学中の方々に興味のある方は学生会へご連絡ください。

そして、開催校選びですが、グローバル化した今日の社会で高等教育における国際化は非常に重要なキーワードです。限られた所ではなく可能性を広げる、より多くの日本の学生さんが海外大学院留学に興味、感心を持ち、挑戦してみる。これを少しでも可能にすることが我々米国大学院学生会の目標です。そのために、現在のところ説明会開催校は旧帝大が中心になっていますが、まだ開催されていない大学で留学説明会を行い、更に多くの日本の学生に海外大学院留学という選択肢を知って頂くのは重要だと感じます。

米国大学院学生会 <http://gakuiryugaku.net/>

【ニュースレター編集部】

原 健太郎 石原 圭祐 高野 陽平 大勝 裕子
山田 亜紀 辻井 快

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中!

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動(留学説明会、メンタープログラム)に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。
<http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php>

編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。 <http://www.facebook.com/gakuiryugaku> こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります!

今月号から本格的に編集作業に参加し、改めて感じたことは「言葉の難しさ」です。編集に加えて、論文及びプロポールの執筆、学会発表の準備など今月は特に書くこと、伝えることについて日本語と英語の両方で考える機会が多かったことも影響したと思います。きちんとした文章を書く力は場面を問わず必須なので日本語、英語の両面で日々磨きをかけていきたいです。(高野)

ニュースレター班は、前編集長が引退し新しいメンバーが入り一新しました。私自身は、地道に続けていけば何か大きな

ものになるのではないかと、という期待を込めて本ニュースレターに関わっています。読者の方の中で要望があれば、留学生・留学経験者の中で記事を書いてみたいという方がいれば、気軽に編集部までご連絡ください。(原)

今学期は研究の傍ら Science & Cooking というハーバードの学部生向けの授業の TA をやっています。調理とは物質の相変化を自在にコントロールすること、を合言葉に工学部の教授 2 人が毎週有名シェフを呼び寄せ、講義をするという変わった授業です。高校レベルの基礎的な

物理と化学を使って、アイスクリームやチョコレート の作り方とその歴史、調理前後でのステーキの弾性変化、減圧蒸留機を使った抽出法、食品添加物の話などをもとに、一風変わった実験を主に文系の学部生にわかりやすく教えています。厨房のような実験室での授業も、みんな食べ物のこととなると興味が湧くようでノリがよく、楽しく教えています。毎週月曜日のシェフの講義は iTunesU や YouTube でも公開されているので、興味ありましたらみなさんも是非ご覧ください。 www.seas.harvard.edu/cooking (石原)